詩篇 59 篇より

0 指揮者のために。「滅ぼすな」の調べに合わせて。ダビデのミクタム。ダビデを殺そうと、サウルが人々を遣わし、彼らがその家の見張りをしたときに

1 わが神。私を敵から救い出してください。私に立ち向かう者が届かぬほど、私を高く上げてください。
2 不法を行う者どもから、私を救い出してください。血を流す者どもから、私を救ってください。
3 今や、彼らは私のいのちを取ろうと、待ち伏せています。力ある者どもが、私に襲いかかろうとしています。【主】よ。それは私のそむきの罪のためでもなく、私の罪のためでもありません。
4 私には、咎がないのに、彼らは走り回り、身を構えているのです。どうか目をさまして、私を助けてください。どうか、見てください。
5 あなたは万軍の神、【主】。イスラエルの神。どうか目をさまして、すべての国々を罰してください。悪い裏切り者は、だれをもあわれまないでください。セラ

6 彼らは、夕べには帰って来て、犬のようにほえ、町をうろつき回る。
7 見よ。彼らは自分の口で放言し、彼らのくちびるには、剣がある。そして、「だれが聞くものか」と言っている。
8 しかし【主】よ。あなたは、彼らを笑い、すべての国々を、あざけられます。
9 私の力、あなたを私は、見守ります。神は私のとりでです。
10 私の恵みの神は、私を迎えに来てくださる。神は、私の敵の敗北を見せてくださる。
11 彼らを殺してしまわないでください。私の民が、忘れることのないためです。御力によって、彼らを放浪させてください。彼らを打ち倒してください。主よ。私たちの盾よ。
12 彼らの口の罪は、彼らのくちびるのことばです。彼らは高慢に取りつかれるがよい。彼らの述べる、のろいとへつらいのために。
13 激しい憤りをもって滅ぼし尽くしてください。滅ぼし尽くして、彼らをなくしてください。そうして、神が地の果て果てまでもヤコブを治められることを、彼らが知るようにしてください。セラ
14 こうして、彼らは夕べには帰って来て、犬のようにほえ、町をうろつき回る。
15 彼らは、食を求めて、うろつき回り、満ち足りなければ、うなる。

16 しかし、この私は、あなたの力を歌います。まことに、朝明けには、あなたの恵みを喜び歌います。それは、私の苦しみの日に、あなたは私のとりで、また、私の逃げ場であられたからです。
17 私の力、あなたに、私はほめ歌を歌います。神は私のとりで、私の恵みの神であられます。

詩篇59篇は、Ⅰサムエル19:11以下のダビデの経験が背景にあると言われています。人気が鰻登りのダビデを激しく妬んだサウル王は、寝首を掻かんとダビデの自宅に使者を送り、夜襲を仕掛けました。詩篇 59 篇に特徴的な「**犬**」という単語が複数回出てきますが（６節、14 節）、腹をすかせた野犬がウロウロと徘徊するように、敵がダビデの家を取り囲んでいる様子を思い浮かべることができるでしょう。八方塞がりとなり、家の中で息を潜めるダビデの姿が想像されます。このときに機転を利かせた妻ミカル（サウルの娘でダビデの妻）は、ダビデを窓から逃げさせ、寝床に代替物を仕込んでやり過ごしました。

この詩が書かれたのは、ダビデが老齢になって、前半生を振り返った時期かもしれません。あの危機的状況から主は救い出してくださったという経験を、王として国を治めるようになったいま、同胞に裏切られ、諸外国から攻撃を受けるような様々な状況に当てはめているように読めるのです。それは、「**国々**」（５節）とか「**地の果て**」（13 節）といった表現にさりげなく現れています。

驚かされるのは、ダビデが自らを「**それは私のそむきの罪のためでもなく、私の罪のためでもありません。私には、咎がないのに**」（３～４節）と、全き身の潔白を神に主張している点です。これはもちろんダビデに罪がなかったということではなく、サウルに命を狙われる言われがなかったということ、理不尽極まりない動機で追われているということです。私たちは人間関係のトラブルを抱えるとき、どちらか片方だけに原因があるとはなかなか言い切れないものです。自分は自覚していなくても問題の一端を担っていることが多い。しかし、この時のダビデはサウルの殺意の動機が妬みにあることを知っていたのでしょう。その憎しみがあまりに一方的であったがゆえに、神に対して純粋に訴えることができたのです。真実な祈りには力があります。

８節以下は、ダビデが終生経験してきた度重なる神の守りの総まとめと言ってもよいでしょう。「**あなたは彼らを笑い、すべての国々をあざけられます**」（８節）は、詩篇2:4を思い起こさせます（**天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる**）。悪しき陰謀は、高いところから一切を見ておられる神によって必ず打ち破られる。全能なる神を味方につけた者は揺るぎなく、後になって自分が守られていたことを見出すようになります。

ダビデは神を自分の「**盾**」（11節）、「**とりで**」（９節、16節、17節）、「**力**」（９節、17節）、「**逃げ場**」（16節）、「**恵みの神**」（10節、17節）と呼びました。私たちにとって、神様とはどういう存在でしょうか。神の御前に二心なく生きていたダビデにとって、神は「近い」存在でした。私たちも常に自分の前に主を置き（詩篇16:8）、私の「**盾**」「**とりで**」「**力**」「**逃げ場**」「**恵みの神**」と呼びたいと思います。